

## タイ北部山地民子弟と寺院学校

— Temple Schools and Hilltribe Children in Northern Thailand —

坂 元 一 光

Ikko SAKAMOTO

タイの寺院学校は僧侶の養成ばかりでなく、主として経済的、家庭的理由で中等教育を受けられない子弟に対し、無償で教育機会を提供する宗教・教育施設である。こうした寺院学校がタイ山地民およびその子弟にとって持つ意味は特に大きいと思われる。なぜなら、一般的に彼らの多くが、その隔絶した居住環境や経済的問題のために正規の教育機会を奪われており、寺院学校はそれを補う貴重な受け皿になっていると同時に、布教や地域開発などの関連活動によって、山地民社会と平地社会との交流・接触の重要な窓口となっているとも考えられるからである。今回はタイ山地民の大部分が居住するチェンマイ県で、在学生のほとんど全部が山地民から構成されているひとつの寺院学校を中心に上げ、寺院教育の現状とその成立の背景となった山地社会への仏教布教計画、及びこれらをめぐるいくつかの問題について触れてみたい<sup>(1)</sup>。

### 1. タイ仏教寺院における教育活動

上座部仏教国タイにおいては、伝統的に仏教寺院と僧侶は、人々の日常生活の中に深く根をおろし、その価値観や行動規範の形成あるいはさまざまな地域活動の実践において大きな影響を与えてきた。特に寺院は地域社会における宗教的センターとしてばかりでなく、近代的な教育制度が導入されるまでは、地域社会で唯一の世俗的な教育機関として重要な役割を果たしてきた。タイの子供たちは寺院の中で僧侶から直接に読み書きや仏教的な道德規範を教えられていたのである。

ラマ5世によってタイに近代的な教育制度が整備されるにおよび、そうした寺院における教育的な機能は失われたかのように思える。しかしながら、地域社会のレベルで寺院の活動に注目するとき、かつての寺院教育とはまた別の新しい形態をとりつつ教育の領域に深くかかわっている姿が見えてくる。

仏教徒が国民全体の約95%を占めるタイでは、仏教は「ラックタイ」(タイ原理=民族、国王、仏教)の構成要素のひとつとして、国民統合のための重要な精神的支柱となっている。このためタイの教育制度においては、公教育の中に宗教(仏教)教育が組み込まれており、学校においては担当の教師によって仏教が正式の教科として教えられるばかりでなく、地域の寺院からは直接に僧侶が招かれ仏教関連の授業を行なったりもする。また、上座仏教の重要な祭日には、生徒たちは学校から寺院へ出かけていってローソクや供物をささげる。さらに授業の一環として地域の寺院の清掃や雑用を行なったりもしている。

一方、学校において正規の授業の一環として仏教教育を行なう以外に、寺院が主体的に行なう教育的実践もある。例えば、毎週日曜日に寺院において、子供やその保護者たちに対し仏教教育を中心に、タイ語、英語、タイの伝統文化などについて教える「仏教日曜教育センター」(ロンリアン・プッタササナー・ワンアティット)は、寺院による自主的なノンフォーマル教育機関として、今日、全国的に普及しつつある(石井 1991: 175-178、村田 1995)。

また、見習僧(サーマネーン)の体験を通して、子供たちに仏教教義や規範を身につけさせる「夏季出家プロジェクト」(クロンカーン・バンパチャー・ウバソンボット・パーク・ルドゥローン)も宿泊施設を備えた比較的大規模な寺院を中心に積極的に実施されている。これは、学校の夏休みの1ヶ月間を利用して、得度式を受けた見習僧として寺院に寄宿し、実際の寺院生活を体験しながら、仏教教義や規範を身につけるプログラムである。この研修への参加費用は無料で、関係者の寄付と宗教局の補助によってまかなわれる。寺院での得度式の他、その際に行なわれる伝統的な祭やパレード(ルッ・カオ)も実施され、かつて村落社会で見られたままの行事が再現される。参加者が得度式を受けた見習僧として寺院で寝起きしながら教育を受けるという意味において、この研修は小論で扱おうとしている寺院学校の形態に類似しているといえよう。以上の例からも分かるように、近代的な教育制度が整った今日においても、タイの仏教寺院は、依然としてさまざまな形で子供たちに教育の機会を提供し続けているといえる。そして、これから述べる仏教寺院学校(ロンリエン・プラパリヤッティタム)も、寺院が主体的に提供する今日的な教育機会のひとつとして注目される制度である。

## 2. タイの寺院学校

タイの寺院学校は、タイ上座部仏教寺院に併設されたインフォーマルな中等教育機関である。寺院学校では、次世代の僧侶の養成を主たる目的としながら、同時に文部省の認可する正規の中等教育の課程も提供している。ここでは、僧侶の養成が前提となっているところから、寺院学校入学者(男子に限る)は、まず、僧侶(主としてサーマネーン)として出家することが要求される。そのため彼らは入学前に、「得度(Ordination)」の儀礼を受け、剃髪し黄衣をまとった僧侶にならなければならない。こうして、入学後の生徒たちは上座部仏教の僧侶としての修行を積むと同時に、一般の中等教育の教科を学習するのである。このような寺院学校は、最初、バンコクのマハチュラロンコン仏教大学のなかにパーリ語学校として開設された(1889年)。以後、現在に至るまでその数は増加の一途をたどり、今日では全国で272校、39,275人の生徒数を数えるまでになっている(「チェンマイ市チェトボン寺院学校要覧」1992年)。

通常、学校施設は寺院の敷地内に設けられ、校舎の他に見習僧の生徒の宿泊施設である寮もこれに含まれる。この寄宿舍はアパート形式のものから、1名~数名で小家屋に寝起きするバンガロー形式のものまで、学校によって多様である<sup>(2)</sup>。見習僧の教育に関しては、一般教科目を俗人の教師が教え、仏教関連科目は僧侶がこれを教授する。さらに、寺院学校では専任の教員ばかりでなく、一般の学校からも多くの教師がボランティアや非常勤として教えに来る。事務職員に関しても一般の俗人と僧侶とで構成されている。

カリキュラムに関しては、各寺院学校がその裁量、あるいは必要性によって付加する科目(パーリ語などの仏教関連科目が主)をのぞいては、一般の中学・高校と同一のカリキュラムが用いられている。そのため、寺院学校における習得単位は通常の文部省の管理下にある中学・

高校と全く同等に評価され、修了時には正規の中学・高校と同じ卒業資格が得られることになる。さらに、寺院学校という性格上、その運営費用は民間からの喜捨と政府（宗教局）によって支えられるために、生徒の授業料、寄宿料などはほとんど不要である。したがって、経済的な理由から中学・高校への進学を断念せざるをえない貧困層の子弟や親たちにとって、補完的な教育機会を得られるこの種の寺院学校は大きな魅力となっている。さらに、タイ仏教においては、僧籍からの離脱あるいは還俗は個人の意志にゆだねられ極めて自由である。したがって、無償の中等教育の機会を得ることを主たる目的に、寺院学校に入ってくる子弟が数多くいることもまた事実である。そして、入学動機におけるこうした傾向は、北部山地民の間においてはなおさらの顕著であるように思われる（Bangkok Post, July 21, 1994）。

### 3. 山地民のための寺院学校

以下に紹介する「シーソーダ（Srisoda）寺院学校」は、1971年にシーソーダ寺に設置された北部タイ地域における最初の寺院学校である。そして、この寺院学校はその生徒のほとんど全員が山地民（チャオカオ）の子弟で構成されており、山地民社会への仏教の布教とそれを軸にすえた地域開発を目的とする「タンマー・チャーリック（法の巡歴）計画」（Buddhist Mission programme, Phra Dhammajarik programme）の中核寺院でもある。以上の特徴から、シーソーダ寺院学校はタイの寺院学校のなかでも特異な位置を占めているといえる。

シーソーダ寺院学校はチェンマイ市の北西5キロメートル程の山間に位置するシーソーダ寺の境内にある。本堂、仏塔、講堂などの寺院施設のなかに教室、事務室などの入った3階建てのコンクリートビルが建っている。見習僧の生徒が寝泊まりする寮も、同じく3階建てのコンクリートビルで、寺院の横を走る一般道路を隔ててすぐ隣に建てられている。通常、寺院学校にはこのような見習僧の生徒のための寮が備わっているのであるが、寮をもたない寺院や生徒数に比してその収容能力に限界がある場合には、生徒は近隣の寺院に住み込み、そこから学校に通学するという形態をとる。

シーソーダ寺院学校の場合もその生徒数に比して、教室や寮などの収容能力に限界があるために、近郊のサンサイ郡に新しく校舎や寺院施設（ウィワツワナラム寺院、Wat Wiwakwanaram）を建設し、生徒たちを2ヶ所に分けて教育している。

表1. シーソーダ寺院学校 生徒・学級数（1995年）

課 程	学 年	生徒数	学級数
中学校課程	中学1年	4 3 0 人	1 2 学級
	中学2年	2 6 0	6
	中学3年	2 0 0	5
	小 計	8 9 0	2 3
高等学校課程	高校1年	1 2 0	3
	高校2年	6 0	2
	高校3年	4 5	1
	小 計	2 2 5	6
合 計		1 1 1 5 人	2 9 学級

（シーソーダ寺院学校資料）

表2. シーソーダ寺院学校 教職員構成

教 員	人 数
僧侶（ビク）教師	20人
見習僧（サーマネーン）教師	0
俗人教師	10人
合 計	30人
職 員	26人

(シーソーダ寺院学校資料)

シーソーダ寺院学校の規模は、中学課程が23学級、890名、高校課程が6学級、225名で合計1,115名である。このうち市内のシーソーダ寺院学校で開講されているのは中学1年段階と高校3年段階であり、残りはウィワツワナラム寺院の分校で学習と修行を行なっている。教員数は俗人、僧侶をあわせて26人である。さらに、シーソーダ寺院学校では、チェンマイ師範大学の教師の出向を受け、1ヶ月平均5日程度の講義を受講するシステムも備えている。

シーソーダ寺院学校のもうひとつの特徴は、山地民の子弟たちに、初等教育の機会を提供するコースを備えている点である。山地民子弟の場合、おうおうにして、その隔絶した居住環境や移動生活などの理由から、義務教育であるはずの初等教育を十分に受けていない者も少なからずある。こうした子弟を対象に中学校への準備段階としてインフォーマルな初等教育の特別コースを設けているのである。1995年現在、その学習レベルに応じて3つのグループに分けながら合計81名の生徒がここで学習している。

彼らの多くは未だ見習僧としての知識や年齢に達していないこともあり、とりあえずは俗人子弟としての身分で、寺院の雑用を手伝いながらここで学んでいる。かれらは得度を受けていないため、服装も黄衣ではなく通常の私服を着用している。シーソーダ寺院学校における彼らの生活は、かつてのタイ社会の伝統的な寺院教育の中に見られた「デクワット（寺子）」を彷彿とさせ、きわめて興味深いものがある。

表3. ベンジャマボビット寺院で「得度」を受けた山地民（1993年）

民 族	見習僧(サーマネーン)	比丘 (プラー)	合 計
1. カレン	76人	9人	85人
2. モン	25	2	27
3. ミエン	28	1	29
4. アカ	9	0	9
5. リス	9	0	9
6. ラフ	8	0	8
7. テイン	5	0	5
8. ルア	1	0	1
9. ビートンルアン	1	0	1
10. 他	24	2	26
合 計	186人	14人	200人

(Administration office of Buddhist Mission:1993 p63)

シーソーダ寺院学校へ入学する山地民子弟は、まず、バンコクのベンジャマボビット寺院において得度のための学習と儀礼を受けることになっている。(表3)はシーソーダ寺院学校へ入学する前に、バンコクのベンジャマボビット寺院において、得度式を受けた山地民子弟の民族別の内訳である(1994年)。これによってシーソーダ寺院学校に入学してくる生徒の民族構成に関するおおよその傾向を推し量ることができる。表からは入学してくる生徒の民族構成として、カレン族、モン族、ミエン族が多数派を占めていることが分かる。さらに、生徒におけるこのような複雑な民族構成を見ると、シーソーダ寺院学校での生活や学習上のさまざまな問題も予想される。例えば、言語の違いによる学生間あるいは学生と教師間の意志疎通の問題は最も深刻であり、また、食事など民族ごとに異なる慣習上の問題もあって、年間に30人程の中退者を出しているという<sup>(3)</sup>。

#### 4. サンガの国家開発政策支援

シーソーダ寺院学校における生徒が全員、山地民子弟であること、インフォーマルな初等教育課程を持つことなどの特色は、実は、タイの出家者集団のサンガが内務省公共福祉局と連携して実施した「タンマ・チャーリック(法の巡歴)計画」との関係を抜きにしては語ることはいできない。シーソーダ寺院学校は、山地社会への仏教の布教と山地社会の開発を目的に発案された「タンマ・チャーリック計画」のいわば中核センターとして開設されたのである。

1960年代初め、サリット政権は強力なリーダーシップを発動しながらタイ社会の近代化と国家開発に乗り出した。国内的には主として地方開発を推進し、対外的には当時の東南アジア地域に台頭しつつあった共産主義勢力の脅威を排除することによって、タイの国家的統合を確固たるものにしようとした。この過程の中でサリット政権は、国王と仏法を国民の共通の精神的支柱としてすすめる方策をとる。タイでは伝統的に僧侶は地域社会の宗教的代表としてあるばかりでなく、多くの場合、世俗的な地域活動の中心人物でもあった。そこで、サリット政権は1962年、「新サンガ法」を制定することによってサンガ(出家者集団)を中央集権的に再編、その世俗権力への従属を実現し、サンガおよび僧侶を国家統合と開発の手段として効果的に活用しようとした。サンガ自体も、共産主義の脅威を中心とする当時の東南アジアの政治情勢や急激な社会変化にともなうタイ社会内部の世俗化の問題など、自らを取り巻く危機的状況に関する認識を持っていた。このような情勢の下で、サリット政権とサンガとは、その危機意識を共有するばかりでなく、それらの克服の手段においても共通の方向性を見いだしてゆくことになる。

こうして仏教の布教活動を軸に教育や技術、公衆衛生などの生活の各方面にわたり地域住民の生活向上のための活動が積極的に推進され、さらに、それは国境地帯、山岳地域においては、特に共産主義勢力阻止のための効果的方策のひとつとして重視されたのである。

1964年から5年にかけて、サンガは時の政権と連携するかたちで、仏法の布教と地方開発を抱き合わせた二つのプロジェクト、「タンマ・トゥット(法の使節)派遣計画」と「タンマ・チャーリック(法の巡歴)計画」を発足させた(Mulder 1973: 23-26、Somboon 1977、石井 1991: 169-175)。「タンマ・トゥット(法の使節)派遣計画」では、1. 仏教の復興とサンガの地位回復および道徳観の混乱と共産主義者の浸透活動から民衆を救う 2. 国家、政府、国王に対する民衆の忠誠心を発揚する 3. 民衆間のあるいは民衆と政府間の理解を育成することによって国家統合を推進する 4. 村民のモラルの向上と開発の援助、などの目標をかかげ、バンコクの仏

教大学の学生僧が中心となって地方の村々をまわった (Sommboon 1993: 68-69)。かれらは数日から一週間にわたって村に滞在し、村人に対して仏教の教えを説くとともに国王や国家への忠誠心、あるいは地域開発の重要性を説明したり、また、健康管理、生活環境の改善など村民生活の各方面における指導を行なった。このような説法と同時に、村人に対して薬品や仏教書籍、その他の物質的援助品も手渡された。

## 5. 山地民同化政策としての「タンマ・チャーリック計画」

一方、「タンマ・チャーリック (法の巡歴) 計画」(Buddhist Mission programme, Phra Dhammajarik programme) もそうした仏法の布教と地方開発を抱き合わせたプロジェクトのひとつであるが、特に山地民社会を対象としている点に特徴があった。内務省公共福祉局とサンガの共同プロジェクトである「タンマ・チャーリック計画」の主たる目的は、1. 北部タイの山地民の間に仏教を広く知らしめる 2. これら山地民の間の仏教信仰を強化し、仏教徒になるよう促す 3. 山地民の間のタイ人としての意識を高め、国家や宗教 (仏教)、国王への忠誠心を育成する 4. 山地民がタイ人としての意識を持つように、他のタイ人と同じように仏教を信仰するように、そして政府の役人は彼ら山地民にも他のタイ人と同じ利益をもたらすための仕事をしているということを理解させるために、山地民と政府、役人との間に友好的な関係と理解を得る、ことであった (Somboon 1977: 104-105)。そして、「タンマ・トゥット派遣計画」と同様、こうした目標を達成するための僧や見習い僧の実際の仕事には、単に仏教の布教や国家への忠誠心を説くことだけにとどまらず、薬品や援助物資の配布、あるいは生活改善のための実際的な指導や助言も含まれていた。

これらの目標からうかがわれるのは、「タンマ・チャーリック計画」における異民族同化政策的な姿勢と国家安全保障的な内容である。タイ政府の山地民に対する政治的基本姿勢は、彼ら山地民の保持する宗教的、文化的独自性を認めたとうえで、かれらの平地タイ社会への同化を促す統合理念を前提としてきた。マッキノンによるとタイ政府による同化統合政策は、その具体的内容においておおよそ以下の3つの範疇に分けて捉えることが出来る。まず、行政的側面においては、その人口や所在において未だに不確かな山地民を政府の行政機構のなかに包摂し明確に位置づけながら、彼らの中にタイ国民としての自覚をもたせる。また、山地民のアヘン生産に関しては、政治的、社会的な弊害をもたらすアヘンの生産を放棄させるために、他の換金作物の導入や教育の普及に努める。そして最後に、山地民社会の開発事業をすすめることによって、その生活水準の向上と人口の抑制をうながすという方針である (Mckinon 1989: 18-23)。「タンマ・チャーリック計画」における仏教の布教は、このような政府の山地民同化政策の基本方針にそった形で、国境付近の安全や治安を確保するための手段としての性格を色濃く持っていたといえる (石井 1991、林 1991)。

上記の目標をかかげ、アジア基金と内務省公共福祉局の援助を受け、1965年バンコクのベンジャマボピット寺を中心に結成された最初の仏教僧侶団が山地社会に派遣された。50名の僧は5人ずつ10のグループに分かれ、タク、チェンマイ、チェンライ、メーホンソン、ベッチャブーンに住む6つの山地民集団 (メオ族、ヤオ族、カレン族、リス族、アカ族、ラフ族) の10村落において、約1ヶ月半にわたる布教活動を展開した。この最初の僧派遣計画によって、約5000人の山地民が仏教の教えに触れ、約800人が信者となり、うち12人が見習い僧となったと報告

されている (Somboon 1977: 105)<sup>(4)</sup>。

その後もプロジェクトは継続され、山地民子弟を見習い僧として平地社会の寺院学校に送り込んでいたが、そのうち見習い僧たちの間で、言語や習慣からくる摩擦が生じることが分かった。そこで1970年タイ北部地域の中心都市であるチェンマイのシーソーダ寺に、山地民子弟だけを集めた寺院学校を建設することにし、同時にそこを「タンマ・チャーリック計画」が北部タイ地域の山地社会に建設している布教センターの中核として据えることにしたのである。

山地を中心に布教と住民の福祉のために建設されている「タンマ・チャーリック計画」の施設（センター）は、1994年の時点で北部タイ17県にわたり183ヶ所を数え、365人の僧侶が派遣されている。183ヶ所のセンターは、地域ごとに4つのエリアに分けられ、シーソーダ寺がそれらを統括する形態をとっている<sup>(5)</sup>。

これら「タンマ・チャーリック計画」のセンターは、主として北部タイ地域を中心とした山地民が多数居住する山間僻地を中心に開設されている。各センターには派遣された僧および見習僧が数名ずつが常駐し、仏教の布教と地域開発のための教育・援助活動をすすめている。センターの開設は必ずしも山地民の住む山間僻地だけとは限らない。平野部にはそのおののちに特別の機能を持たせていくつかのセンターが存在している。例えば、チェンマイ県サンサイ郡のウィワツワナラム寺には、山地民の女子だけを対象に中等教育と職業訓練をおこなうセンターがある。同じくメーアイ郡のパケオ寺にはアヘン中毒患者の更正センター、サンパトン郡バンビアン寺には老人扶養を中心としたセンターが開設され、それぞれに特色のある活動を行っている (Nipa & Taworn 1993)。

このように年々センターを増やし、特色のある活動も積極的に展開されつつあるプロジェクトであるが、そこに全く問題がないわけではない。まず全体として予算および資材、薬品などの不足がある。僧に関しては山地に派遣されるのが若い僧や見習僧が中心であるために、知識や技能などの経験不足の問題、あるいは現地における言語の違いや習慣の違いが彼らを悩ませている。本来ならば自分の出身地のセンターで活動すればそのような問題も解消するはずであるが、僧の産まれ育った地域ではその村の年長者に対して、僧侶として威厳をもって接することができないという。また、派遣される僧は任地を山間僻地ではなく、生活や布教の容易な平地部を希望したがるという現実的な問題も指摘されている (ibid.)。

## 6. 山地民女子訓練センター

最後に、小論を終えるにあたり、残された問題の指摘も兼ねて、最近発足したひとつのセンターについて触れてみたい。これまで概観してきたように、北部タイ地域における寺院学校は、経済的、地理的な理由で正規の中等教育の機会から遠ざけられてきた子弟（特に山地民）にとって、それにかわる貴重な補完的制度を提供しているといえる。シーソーダ以外の寺院学校も含めると、推定で年間に1000人近くの山地民子弟が見習い僧としての得度を受け、この種の学校に入学している (Bangkok Post, July 21, 1994)。この事実は山地民の子弟の個人的な教育機会の保障というだけでなく、もし彼らが卒業後にプロジェクト僧の一員として山地へ帰還し、山地民社会の教育や開発に寄与することになれば、山地民社会全体にとっても大きな意味をもつことになると思われる<sup>(6)</sup>。

しかしながら、たとへこれら寺院学校や各地のセンターが有効に機能したとしても、そこに

は決定的に欠落している側面があることを忘れるべきではない。というのは、少なくとも寺院学校は僧侶の養成という前提から、山地民子弟のうちの男子だけが念頭におかれ、女子に対して同じような補完的な機能を果たしていないのである。伝統的にあるいは原理的に仏教は男性と女性を明確に区分し、特に女性に対しては解脱のための修行の妨げになる存在として、これを厳しく排除する傾向にあった。それ故に、寺院学校がこのような仏教原理を前提にしている限り、女子は初めからその対象の枠外におかれているのである。すなわち、山地民子弟のための寺院学校とはいえ、結果としてはその半数にあたる子供たちを切り捨てた制度でしかないともいえよう。しかし、関係者の間にこうした深刻な問題に対する認識が全くないわけではない。チェンマイ市近郊のひとつのセンターでは、山地民子弟の女子のための教育活動が試みられようとしていた。

シーソーダ寺院学校はその収容能力の問題もあり、チェンマイ市の近郊にウィワツワナラム寺院分校をもっている。そして、ここには見習僧の生徒のための寺院・教育施設のほか、山地民の女子のための中学校および職業訓練センターも併設されている。そこには教職員の宿舎と女子学生52人のための寮、調理室、食堂兼教室そして菜園など山地民の女子子弟が寄宿生活を送りながら学習し職業訓練を受けるためのひとつの施設が準備されている。

当然のことながら、この施設は見習僧たちの寺院学校とは空間的に隔離されている。ただ、その敷地は互いに隣接しており、林道をぬうように走る500メートルほどの小道によってこれらふたつの施設は結ばれている。このように男子の寺院学校とは注意深く隔離されてはいるものの、全く接触がないわけではない。朝と昼の見習い僧の食事の準備と配達をこのセンターの女子生徒が担当している。見習い僧たちの一日2回の食事時間になると、約600名分の食事と手伝いの女子生徒をのせた小型トラックが林道の小道を往復するのである。

このセンターは、今年（1995年）発足したばかりの新しい施設であり、現在、教育機会としてはインフォーマルな中学校課程と職業訓練のための施設を備えている。さらに、仏教寺院のプロジェクトということもあり、通常教育科目のほか、夕方には僧による瞑想の時間や仏教教義に関する時間が設けられている。

ここに集まった女子生徒は14才から16才までの52名の山地民で、カレン族、モン族、ミエン族、リス族、ティン族、ルア族の6つの山地民社会から来ている。彼女たちは前述のタイ北部17県の山地民社会に設置されたセンターにおいて公募された者で、300名近い希望者の中から選抜された生徒たちである。現在、職業訓練も始まったばかりで、ひとつの作業所のなかで服飾（最初は僧の黄衣をつくる）の訓練だけを受けている。他にも土産物の人形づくりのための材料も置かれており、これは基礎的な技術が身についた次ぎの段階でとりかかる予定になっている。

発足したばかりとはいえ、このセンターの持つ意味は大きい。寺院学校は一般の教育機会から遠ざけられた貧困層や山地民の子弟に対し、その補完的な教育機会を提供してきた。しかし、現実には、僧侶の養成を目的とするという前提から、あるいは仏教の教義上の理由から、本来ならばそうした教育機会の補完を必要としている子弟の半数を占める女子にまでこれを準備するには至っていない。

このセンターの試みは男子にたいするそれに比べて、規模的にも内容にもきわめて限られたものでしかない。しかし、これまで関心の枠外に放置されていた女子にたいして何らかの配慮を示したという点で、画期的かつ注目に値する試みであるといえよう。ただ、この試みも始まっ



たばかりであり、その具体的な評価に関しては、今後の経過を待たねばならない。山地民子弟に対する教育機会の補完を、サンガや寺院のように対象の性別によって異なる対応の形態をもつ組織に依存する限りは、せっきくの機会の提供も全体の半分にしかゆきわたらない可能性が強い。山地民子弟の補完的教育に関しては、性別を越えた発想にもとづく制度の整備が望まれるところである。

(注)

小論は「タイを中心とする東南アジア諸社会における伝統文化とその変容の実態に関する文化人類学的調査」(大分県立芸術文化短期大学第1種国外研修)として1995年7月9日から8月30日まで行なった現地調査のうち、特にタイ国チェンマイ市およびその近郊で行なった調査で得られた資料にもとづいている。タイ国での調査期間中は、Chutarut Dethwongya, Weerapol Thongjearm, Spaphorn Thongjearm, Dr.Ket-manee Markmee さんらには大変お世話になった。また、タイ語の表記に関しては平田利文助教授(大分大学教育学部)から御教示いただいた。記して感謝する次第である。

- (1) 今回の寺院学校の調査ではメーリム寺院学校(メタン郡)、ノンコーン寺院学校(メタン郡)、チェトポン寺院学校(チェンマイ)、シーソーダ寺院学校(チェンマイ)、シーソーダ寺院学校ウィワツワナラム分校(サンサイ郡)および山地民女子訓練センター(サンサイ郡)の計5校1センターを訪問した。
- (2) ノンコーン寺院学校ではバンガロー形式の寄宿舎を採用している。寺院の敷地内の林間に1~4名の生徒が寝泊まり出来る小屋が、キャンプ場のバンガローのように散在している。
- (3) これらの問題に対しては、学校側が各民族集団からリーダーを選び、彼を中心としたそれぞれの民族集団内での相互扶助によって、学生の生活や学習上の問題を解決する努力が試みられている(シーソーダ寺院学校でのインタビューによる)。
- (4) 1967年から1970年までに対象村落は20に拡大され、派遣された僧侶の数も100人を数えた(Somboon:1977 106)。
- (5) 1992年段階では、北部タイの17県にわたり、合計117ヶ所を数え、そこには僧侶153人、見習層119人が配置され、布教活動や地域開発活動にたずさわっている(Administration office of Buddhist Mission:1993)。
- (6) シーソーダ寺院学校での卒業(還俗)後の進路は多様である。その主だったものを見てゆくと、1983年度の中学、高校課程の卒業生(還俗者)148人中、公共福祉局関連プロジェクトの補助教員45人、農業(自分の家に戻り農業を含む)が27人、山地地域の教育計画に従事するための教員26人、警察官10人、小学校教員6人、大学進学5人、他の高校への進学5人などとなっている(Tribal Research Institute Chiangmai & Public Welfare Department Ministry of Interior:1985 p 11)。

参考文献

石井米雄『タイ仏教入門』、めこん、1991

林 行夫「内なる実践へー上座仏教の論理と世俗の現在ー」『東南アジアの文化』（講座東南アジア学 第5巻）、1991、93頁－123頁

村田翼夫「タイにおける仏教日曜教育センターの普及」『比較・国際教育』第3号、1995、筑波大学比較・国際学研究室

ピットヤー・ウォンクン『村の衆には借りがある』（野中耕一訳）、サンサン社、バンコク 1993

末廣昭『タイの開発と民主主義』、岩波書店、1993

Administration office of Buddhist Mission, Srisoda Tumpie 1993, *Report of the Buddhist Mission Program in 1993*

Mckinnon, J, & Vienne bernard, 1989, *Hill Tribes Today*, White Lotus Co Ltd., Bangkok

Mulder, J.A. Neil, *Monks, Merit and Motivation : Buddhist and National Development in Thailand*, Center for Southeast Asian Studies Special Report No.1, Northern Illinois University 1973

Nipa, L & Taworn, F., 1993 Special Interview for Phra sunthonputitada about the Phra Dhammajarik programme 30th Anniversarie, *T.R.I. Quarterly* Vol. 17 No.3,4 July December, Tribal Research Institute, Chiangmai

Somboon suksamran, 1977, *Political Buddhism in Southeast Asia*, St. Martin's Press, New York

1993, *Buddhism and political Legitimacy*, Chulalongkorn University Research Report Series No.2, Research Dissemination Project Research Division

Tribal Research Institute Chiangmai & Public Welfare Department Ministry of Interior, 1985, *Evaluation of Education for Hilltribes in Buddhist Mission Program*